

本論文は

# 世界経済評論 2020年1/2月号

(2020年1月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

## 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読  
期間中

デジタル版バックナンバー読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

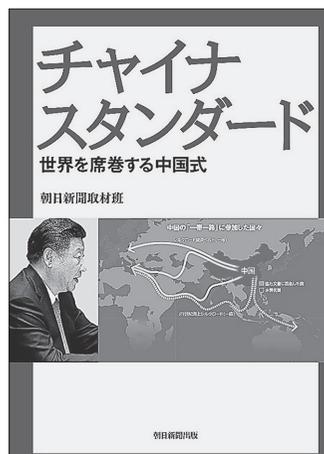
Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。  
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp  
雑誌のオンライン書店

## チャイナスタンダード

：世界を席卷する中国式

外務省経済局政策課企画官 **安部 憲明**



[著者] 朝日新聞取材班  
 [発行] 朝日新聞出版, 2019年7月  
 [判型] 46判, 264ページ  
 [定価] 本体1400円+税

経済協力開発機構（OECD）の開発センターに中国商務部から出向中のK君。日夜、慣れない英文資料を読み込み、全身を耳にする。会議での質疑応答も、最近では実によどみない。

2015年、中国は開発センターに加盟した。中国が「金持ちクラブ」と揶揄してきたOECDの姉妹機関への加盟は、習近平政権の戦略的決断である。同年7月、李克強首相は、中国首脳として初めて訪問し、「一帯一路」との連携強化を謳った。北京の狙いが、ここに集積される先進ドナーの事例や教訓、そこで磨かれる政策的知見の吸収にあることは明らかだ。その先には、中国モデル拡販の意図も見え隠れする。なるほど、国を背負うK君の気合いも頷ける。

本書は、中国式の規格や基準全般を「チャイナ・スタンダード」と呼び、中国が官民一体となって、国際社会でそれを普及させようとする遠大な企画を描く好著だ。靴を履き潰すような取材を通じ、中国の深謀遠慮を国内外の工場や

市場、行き交う人物や製品など近景の表層に投影して見せる筆致は、臨場感満点である。

世の中の「中国スタンダード」を巡る見方は、大きく2つの対称軸で区分されよう。ひとつは、中国の国際基準への向き合い方に関する見方の軸だ。中国の狙いは、圧倒的な価格競争力で国際基準を放逐し、都合のいい基準を確立することにある、との見方の一方で、中国自身、これまでの粗暴な商いや劣悪な製品が世界各地で反発や忌避されたとの反省から、国際基準を学ぶ（真似ぶ）ことにある、との見立てが対峙する。もうひとつは、「一帯一路」が、国外拡張と国民統合のいずれの目標を重視するかに関する推論の軸だ。前者は、スリランカの港湾等を物流や軍事の拠点とする外向きの狙いを強調し、後者は、チベットや新疆の少数民族地域で常に働いている遠心力に対し、北京と直結する道路で辺境の被統治意識を醸成し、開発事業で懐柔するという内向きの思惑を指摘する。

この二つの座標軸上に本書を置けば、本書は、「中国独自」説と「対外拡張」説が囲う象限で、「中国は、欧米モデルを否定し、世界市場を席卷する気だ」という通説の現場検証に徹している観がある。その見方は、一面では正しい。けれども、数年前、多くの欧米の専門家が、既存の開発金融システムに嫌気がさし、中国の確固不動の国家意思と潤沢な資金力や迅速な決定手続をたのみ、アジアインフラ投資銀行の創設に馳せ参じた事実やその心理も見逃せない。また、K君のような「洋務運動」型実務家の存在をどう見るべきか。とすれば、チャイナ・スタンダードは、単にブレトンウッズ体制へのアンチテーゼ、或いは、欧米秩序に対する中華民族主義的な挑戦、とだけ括られる話ではないだろう。本書が、30数名の気鋭の記者陣による交響曲であるにも関わらず、着想や洞察の緩急にやや乏しいのが惜まれる。

K君は、「中国加盟の翌年に、日本が開発センターに復帰したのは単なる偶然ですか」と寸鉄人を刺す質問を残して、「一帯一路」の最前線たる駐パキスタン大使館に赴任した。本書の続編があれば、彼にも登場願いたい。

（あべ のりあき）